

# 昏蟲の電子迷宮

紅の戦乙女

体験版

作：@1039

## 登場人物

### 未比良 柚乃（みひら ゆの）

ネットセイバー特務機動部に所属する特別捜査官。幼いころにオンラインゲームの電車の中で暴漢によってヴァーチャルではあるが処女を奪われたトラウマを抱えている。

鋭い視線を放つ切れ長の目。背は少し高めで膝まで届く長い燃えるような赤い髪は水のように滑らかなストレート。胸はEカップの巨乳。スリットが入った黒のタイトミニとノーズリーブのジャケットが制服だが、肌を露出するのが嫌う柚乃は、膝丈で鋭いつま先の白いブーツと太ももまでの黒いストッキング、長手袋をしている。

愛銃はコルト・ガバメントM1911A1。赤茶けた銃身が光の当たり方で赤く輝くことから奇妙な縁を感じて愛用している。銃の赤い輝きと長い赤髪で、レッド・ヴァルキリーの異名をとっている。

## 未比良 悠羽莉（みひら ゆづり）

かつて姉が通っていた東都学園に通う。剣道、空手などを習っている武道少女。大きな目が愛らしく、学校でも人気。友達からはアイドルになれると言われるほどだが、男の子っぽい口調やあっけらかんとした性格が問題視されている。そんな性格の割には、東都学園時代に数々のスポーツ大会で記録を残した伝説的な姉に比較されることを気にしている一面もある。

背は低く、胸も小さい。きりつとした目つきで、くりくりと大きくよく動く。栗色の髪は長いが、頭の左右に団子状にして白い巾着（？）で覆っている。制服は紺のブレザーで赤いネクタイと赤系のチエックのミニスカート、黒いハイソックス。

## 御堂 東二（みどう とつじ）

ネットセイバー副長官兼特務機動部部长。十年前に十四歳の娘をレイプ犯に殺された過去を持つ。また、柚乃の父親とは子供のころからの親友。柚乃に娘の姿を重ねて、危険から守りたいと思っているが、そんな想いを外には出さず、明るく振舞っている。短く刈った茶髪に無精ひげ。

未比良 卓巳（みひら たくみ）

柚乃たちの父。ネットセイバーの長官。柚乃や悠羽莉に稽古を付ける格闘技の達人でもあり、優秀なシステムエンジニアでもある。もちろん捜査官としても一流で、若くしてネットセイバーの創立を任され、現在まで身を削るようにして犯罪者と戦ってきた。がっちりとした体格で、少し長い黒髪。

木坂 リョウジ（きさか りょうじ）

悠羽莉のクラスメイト。ネットでは『ベルゼブブ』の名を使っている。ワーム作成の天才。

一方で、暗い祭壇に吊るされる悠羽莉も小さな肢体を震わせ続けている。無数に産みつけられた卵が次々と孵化していくのだ。幼腔の更に奥、子宮の中で卵が膨れあがり、弾けるようにしてワームが生まれる。そして、子宮口をこじ開けて愛蜜でいっぱいになった腔内に蟲が入ってくるたびに苦悦が小さな身体を痺れさせる。さらに処女膜を限界まで広げて秘唇を潜り抜け、滑らかな白腿へと張っていく長大な芋虫のような蟲。みりみりと肉穴を広げられる痛みと一緒に、否定のしようがない快感が小さな背筋を何度も震わせる。

「ああ、あつ、お、お姉ちゃん……は、早く……助けて……うああんっ！」

悠羽莉の前にもモニターが見える。どこからか触手で吊るされているモニターがいくつもあり、自分を見て奇異と好奇の視線を向けるクラスメートの言葉まで聞こえてくる。

「おい、あれ、未比良だろ……」

「さつき、気持ち悪い虫みたいのに卵うえつけられたんだぜ」

「じゃあ、今、マ×コから出てきてるミミズって……」

「やだ、あの子、自分で虫の子供産んじやってんのおっ？」

勝気な悠羽莉だが、そうは言っても多感な年頃の少女なのだ。中には親しい友達の姿もあるが、その子たちまでもが気持ち悪がったり、幼い身体が苦悦に蝕まれる様を面白がっている。

（み、見るなよお……なんか、見られて、変なこと言われたら……アソコが熱くなって……イヤなのにとんだん変になってきちゃうから……）  
ジユブリユルウ。

自らの恥部から響く卑猥な音に思わず顔をしかめる。仮面の男はいないが、祭壇の下にはマントをまとった男たちがずらりと並んでいる。彼らもずっと自分の痴態を見ているのだ。

そして、モニターの中で戦い続ける姉も蟲に内側から犯され続ける自分の姿を見ている。もちろん、その姉もまた足元を這い回るワームに次々と絡みつかれ、美しい豊乳と清廉な秘唇を剥られているのだが。

（お姉ちゃんも、あたしみたいに気持ちよくなってるのかな……こんな……気持ち悪くてイヤなのに、アソコが濡れちゃって……）

悠羽莉の見る前で柚乃は柱の影に隠れ、股間を押さえてうずくまる。黒く光るストッキングの膝先が震え、タイトミニに覆われたその奥で粘液を放つ蟲の大群が蠢いているのが見える。いや、タイトなブーツまでは行けないようだが、ストッキングの中にも小さなワームが侵入している。

（お姉ちゃんの白い脚……あの上を蟲が這いまわって……下着の中まで入ってるんだ……じやあ、お姉ちゃんのアソコにも蟲が入って、いやらしい音とかして……）

淫らな姉の肢体を思い描くと少女の奥底でじゅくりと恥液が湧き出す。足元に落ちた蟲が再び小さな身体に這い登ってくる。その感触がモニターに映る姉の感じている感触と重なり、度重なる淫虐で熱に浮かされたような悠羽莉の思考回路が、姉と自分が触手の海で絡み合う情景を思い描いていく。

「お姉ちゃん、早く……早く、悠羽莉のところに来てよあ……あたしと一緒に……」

だが、そのうわ言のような呟きが聞こえていないのか、柚乃は柱の陰を飛び出して、一気に蟲を撃ち落していく。子宮の中で卵がいくつも同時にはぜる。それだけでも悠羽莉は腰が砕けるような秘悦を味わうことになるのだ。

（ああ、お姉ちゃんが、悠羽莉のこと苛める……あたしのこと犯してる……）

膨らんだ腹が蠢き、蟲たちが同時に子宮口を潜ろうとする。ねばねばとした体液が幼い聖

域を侵食し、滑りのよくなった穴を潜って今や喜悦に痺れきっている幼腔にずると蟲が入ってくる。

「きゃん、うんっ！ お、お姉ちゃんが、あたしに蟲を産ませてるうっ！ あたし、お姉ちゃんに犯されてるみたいだよおっ！」

その叫びが袖乃の手を止めさせる。すると、その声に反応したように蟲の動きが変わった。今まで一匹ずつ狭い門を潜っていたのが、愛蜜の中で絡み合うように何匹もの蟲が一つになっ

ていく。  
「ああ、んう！ な、中から、あたしとお姉ちゃんの蟲が、犯そうとしてるよおっ！ お姉ちゃん、見て、見てっ！」

小さな身体を這いずる蟲。自分の子に聖域である胎内を淫靡に愛撫されている感触。そして、遂に処女すらも奪われようとしている。内側で膨れ上がる異物が処女膜を破らずに出てこれるわけがない。意識に霞がかかったようになってい

る少女は、それを姉によるものだと思

うこと嫌悪を和らげようとしているのだ。  
ぐぶ、ぐぶぶ……  
「うう、あ、ああ……お、お姉ちゃんが……う、産ませる蟲で……悠羽莉の大事なこと……犯されてくよお……」

束になって肉棒のようになった蟲が愛くるしい少女の顔を歪ませ、その処女口を突き破ろうとしている。

「い、いた……痛いけど……我慢するから……お、お姉ちゃん、見てて……悠羽莉、汚れちゃうけど、お姉ちゃんのために我慢するから、ずっと見てて……ひあうっ！」  
じゅぶう、ずぶぶううううっ！





声にならない叫びを上げて悠羽莉の小さな身体が仰け反る。そのまま痙攣し続ける少女の股間から束になった長大な蟲の塊が紅く染まった粘液を纏ってずると蠢きながら這い出してくる。

「ひゃぐ、うぐうう、あ……お、お姉ちゃん……はうう、あぐぐううう、だめ、だめだめだめええっ！」

かろうじて意識を取り戻したのも束の間、半分ほど出てきた蟲の塊がロストバージンの鮮血を振り払うように揺り動き、今度は先端を肛穴に向かわせたのだ。聖域を突き破ったまま今度は排泄口にずぶずぶと潜り込んでいく。さらに続けて生まれてくる蟲も次々と連結するように絡みつき、排泄口に向かう。

「やあああっ！ こ、こんなのやだあっ！ こんな、こんな恥ずかしいのお姉ちゃんに見せないでえっ！ だめだよ、だめだめっ！ やめてつてばあっ！」

だが、蟲は悠羽莉を辱め続けるようにプログラムされている。肛門に入った蟲は中でぐりぐりと渦巻き、再び塊の表面を伝って幼腔へと戻っていく。桜色の肛門と濡れそぼる秘唇の間で蟲の塊が蠢き、少女の恥部と恥部の間を醜悪な蟲が循環し続ける。その繰り返しが続くと少女を苦慮と秘悦の渦に貶めていくのだ。

「悠羽莉、しつかりしろ！ ベルゼブブに神経を操作されて感じてるだけだ。惑わされるんじゃない！」

柚乃は気づいていた。いくら性感帯を蹴られているとはいえ、余りにも快楽が強すぎる。ニコクスは獲物の神経を操作する方法も知っているらしく、襲われた被害者は常軌を逸した快楽で廃人になるほど弄ばれるのだ。

(こんなことで、私自身の手で妹を貶めていると思わせたのか……それとも悠羽莉が私に  
罵られることで快楽が増していくなんていうことがあるのか?)

だが、柚乃もまたベルゼブブの姦計にかかろうとしていることに気づいていない。蟲に辱  
められ、処女を奪われた妹。その姿を見ながら、悔しさを噛み締めて銃弾を放つたびに快楽  
に震えているのだ。

ドンツ！ ドンツ！ズドオツ！

「う、くう、ああはっ！」

銃声と同時になぜか赤毛の捜査官も甘く呻いてしまう。砕けた羽蟲の体液が制服を汚す。  
その甘い臭いを放つ体液が服に染み込み、肌になつとりと絡み付いてくる。さらに、服の中  
に潜り込んだワームがその液を塗り広げていくのだが、その液体こそが先刻からレイ・レ  
ツドに卑猥な声を出させているのだ。

「くっ、キリがないな……ベルゼブブめ、悠羽莉にいくつ卵を植えつけたんだ！」

「そう言いながら、柚乃は歯を食いしばって銃を撃つ。」

「くあ、ま、また……ひぐっ、くううう……」

思わず隠れてうずくまる。銃を撃つ衝撃、それに反応するように肌に絡みつく粘液が熱い  
電流に似た衝撃を走らせる。それが女捜査官の全性感帯を同時に痺れさせるかのような快楽  
をもたらす。柚乃がそのおぞましい効果に気づいても、今は対処のしようがない。

「柚乃っ！ 聞こえるか？ おれだ、御堂だ！」

甘い痺れに耐えていた肩がびくりと揺れる。まんまと敵の術中で弄ばれている最中に最も  
聞きたくなかった声だ。

「一旦、引き返せ。体勢を立て直して長官や悠羽莉ちゃんを助け出そう！」

無言で首を振る袖乃。肉親を助けたいがために先走った行動で御堂に迷惑をかけたのが心苦しいが、もはや引き返すことができないと分かっているからだ。

「無理なんです、部長……もう……走るだけでも身体に電流みたい……し、刺激が走る上に……その……蟲の体液が肌に張りついたまま、だんだん固まってきたんです」

服の中にいる蟲が体液を練り上げている。粘りつく紐のようになって、だんだんと身体を緊縛されているのだ。それを阻止しようとするなら、公衆の面前で制服を脱ぎ捨てなければならぬ。そして、周囲を取り囲む蟲がそれを許すわけもない。

「八方塞がりなんてことあるか！ 待ってる、救援を送る。今はアクセス経路をロックされているが、必ずそれを外していくからな！」

かなり前から古野がそれをやるうとしている。御堂の力が加わっても、すぐに救援に来ることはできないのは明白だ。

（自分でなんとかするしかないな。私しか、今、奴と戦える人間は……ネットセイバーはいないんだ）

身体を緊縛されつつあっても動けなくはない。それに、飛んでいる蟲の数も減り、その動きのパターンも読みきっている。悠羽莉に刺激を与えすぎないように遠慮していたのだが、もうその余裕はない。

「悠羽莉、ちよつと激しくなるが、なんとか耐えしのいで！」

走り出す袖乃。それだけでも柔肌に食い込んでくる粘糸が凄まじい電撃のような快楽を送り込んでくる。銃を撃つ度に、直に性感帯の神経をつま弾かれたほどの激悦が熟した女の身体を容赦なく襲う。

続きは本編でお楽しみください！

Copyright (c) 2009 @039 All rights reserved.

この作品における内容全部について、無断複写・複製・転載はお断りいたします。

URL: <http://1039r.un.blog90.fc2.com/>